

異文化コミュニケーション研究の視点

—多角的研究の課題—

赤坂 和雄*

Perspectives on intercultural communication studies.

K.Akasaka*

はじめに

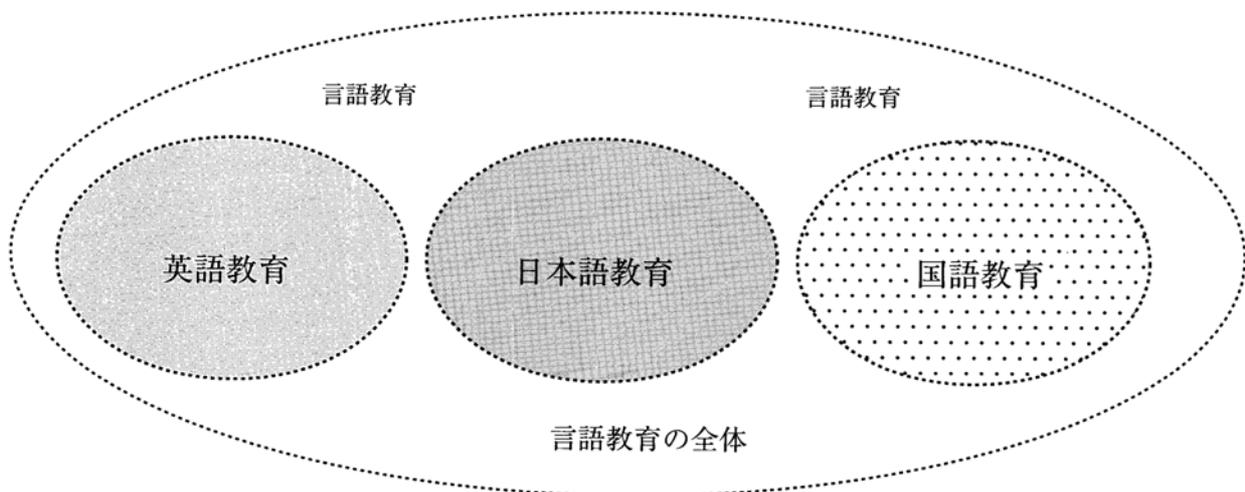
異文化コミュニケーション研究とは何かというテーマは、急速に変化が求められている今日では、大きな課題になってきた。歴史上かつてなかった人口移動が余儀無くされている現在で、地球的規模でマクロな面から観察すれば、今ほど、異文化コミュニケーションの重要性が問われることはかつてなかったであろう。また、コミュニケーション研究の領域は国際間だけの問題ではないということの理解も必要になってきた。

異文化コミュニケーション研究の課題は山積している。異文化とは何かの定義づけなしには異文化を語れないのも事実である。「多文化と他文化」の使い分けにも十分な理解が必要である。コミュニケーション研究といえば、異文化間コミュニケーション (Intercultural Communication) などが従来の大きな研究テーマであった。文部省が10年程前から提案し、すでに中学高校のカリキュラムで取り入れられている英語教育に関しての、外

国語教育指導要領におけるオーラルコミュニケーション A, B, Cなども上げられるが、主にここで考えられているコミュニケーションとは、英語教育のカリキュラムに入れられたものである。オーラルコミュニケーション Cはdebateを教育するカリキュラムになっている。しかし、ここで最近とみに問題とされているのは、現代の日本人、特に若い世代の日本人は、日本語ですら議論する能力に欠けているというのに、英語で議論とは、という問題がマスメディアなどを通じて多くの人たちに批判されているのが現状である。近年は、言語活動における日本語運用能力を目指した言語教育の基礎教育の重要性が叫ばれてきた。そのような状況から見れば、日本における英語教育は、何か重要なものを忘れて先走っているような感もある。英語教育界も国語教育界も根底を流れる言語教育の共通性を理解せず、互いに接点を持たずに教育しているということは不幸なことである。

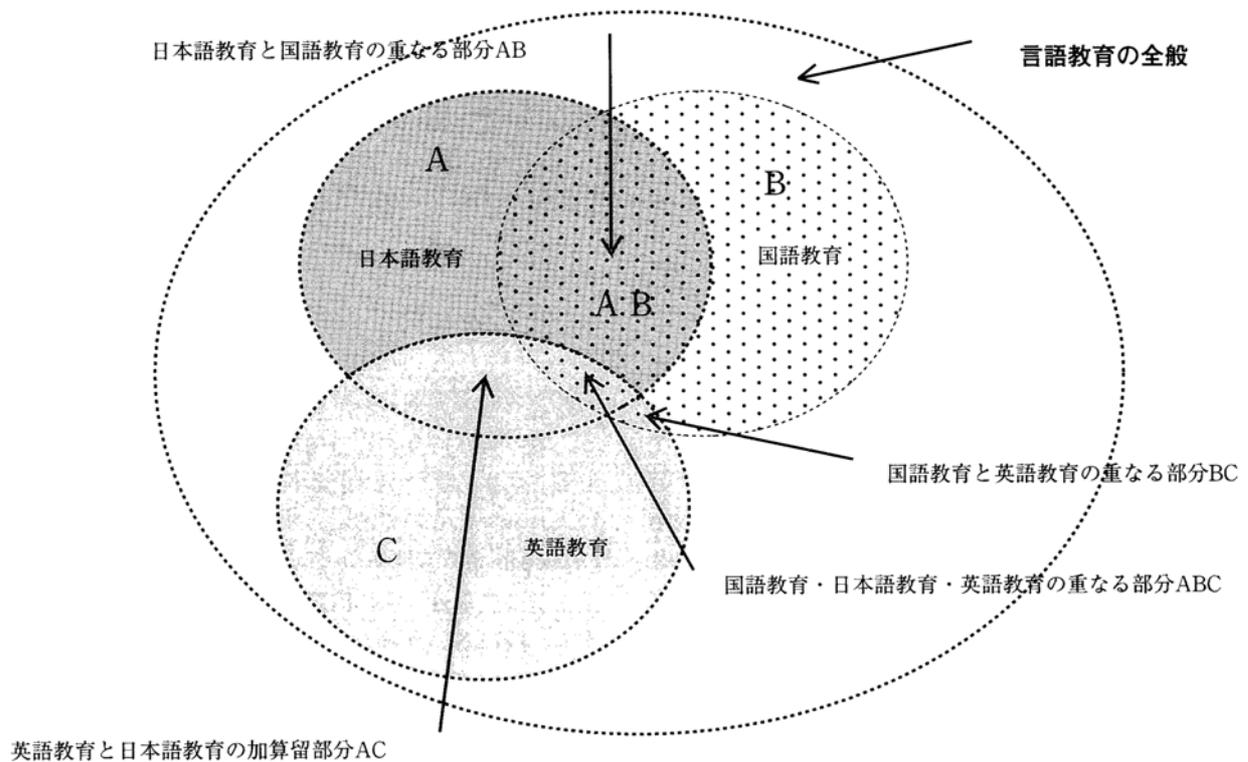
図1は現代の英語教育、日本語教育、国語教育のそれ

図1 現代日本における言語教育の全体像 (赤坂1999)



* 青森県立保健大学人間総合科学

図2 日本語教育・国語教育・英語教育の関係領域 (赤坂1999)



ぞれが、何ら言語教育の共通点を探らず、単独に行われている典型的な型と言えよう。同じ言語教育というフィールドの中にありながら、各々三者がそれぞれの有り方を表している例である。図2は、これら三者が現実に言語教育上、共通する同じフィールドの中で、二者あるいは三者が重なり合う部分があることを示している。これらの重なり合う部分が言語教育の中で、科学的な教育法を生み出して行く重要な部分ともなり得るのである。

日常的な報道関係においても、海外との政治的な議論などで起こる諸問題などが良い例である。常識や価値観の全く異なる国同志の政治折衝には困難を極めている。ことばはもちろんの事、互いが他を理解しようともせず、ただ自己の持つ習慣や常識で対応しているからであろう。

このように、ことば、習慣、常識は文化の重要な要素である。しかも、互いの文化を理解せず自国の文化を押し付けた折衝は困難をきたすだけである。

コミュニケーション研究に必要なのは、先ず己を知ると同時に相手を理解することから始まる。問題は互いの違いをどれだけ理解し得るにかかっているととも言える。従って、今後も増々変わりつつある時流に適合した異文化コミュニケーション研究と教育は不可欠になるであろう。

今までのコミュニケーション研究は、主に国際的な背景を持った異文化の相違を視野に入れた研究が、脚光を

浴びてきていたように思われる。勿論、語学教育の中のコミュニケーション教育は必要ではあるが、ややもすると、コミュニケーションという用語は、特に中学、高校、大学などでの外国語教育だけに直結した専門分野であるかのように、独り立ちして取り扱われている部分もあることは見逃せない。

問題はミクロの中の異文化コミュニケーション研究と教育を如何に推進するかである。今までは、異文化は自国の中の至るところに存在していることを見のがしていた嫌いがある。コミュニケーションに関わる研究課題には膨大なものがある。例えば、国際的な関係におけるコミュニケーション研究は勿論のこと、ミクロの意味での内なる異文化理解と研究が必須になる。すなわち、自国内における地域的な変化による個々の文化といわれる風俗習慣などの認識がそれらに当たる。もっと狭い意味での定義では、自分の往んでいる地域、職場や企業、学校、更には、友人関係におけるコミュニケーションから、それぞれの家庭内における習慣や約束ごとなどがおりなす異文化も存在する。その他、異世代同士、健康な人と病人なども考えられる。ここでは、これらを内なる「多文化」と捉える。

ここで問題提起したいことは、マクロから見ればミクロかも知れないが、国際的なことを背景とした問題だけではなく、内なる異文化すなわち、自国内、地域内、職

場企業内の分野別、教育の場、友人間、さらには家庭内などにおけるコミュニケーション研究とそれら分野ごとの整理が必要となることである。このような点だけから観察すれば、決してミクロの異文化ではなく、個個人にとってはマクロの異文化とも感じられる部分があるのかも知れない。この小論では、今後最も重要視されると思われる対人関係におけるコミュニケーション研究がどのような形で推進されなければならないかを考察する。

文化とは何か；文化を形成するもの

コミュニケーションには文化という用語をきちっとした形で理解することが必要である。広辞苑⁽¹⁾によると文化を次のように定義している。

「(culture)人間が自然に手を加えて形成してきた物心両面の成果。衣食住をはじめ、技術、学問、芸術、道徳、宗教、政治など生活形成の様式と内容を含む。文明とはほぼ同義に用いられることが多いが、西洋では人間の精神的な生活に関わるものを文化と呼び、文明と区別する。」

また岡部⁽²⁾(1996)は文化を次のように定義している。

「文化とは、ある集団のメンバーによって幾世代にも渡って獲得され蓄積された知識、経験、信念、価値観、態度、社会階層、宗教、役割、時間、空間関係、宇宙観、物質所有観といった諸相の集大成であるといえよう。」

両者の定義は結果的には同様の観念を持っている。従って、文化とはそれぞれの民族が造り出す観念的なものと言える。これらの観念的思考で物質的なものを創造し、目に見えるものを作り上げていることになる。すなわち、観念的な文化から物質的文化を形成されているといえる。とはいえ、民族的に異なる部分が多様に存在している、所詮、基本的には人間であるということが重要な点である。Carter⁽³⁾(1997)のThe Island Model of Intercultural Communicationが図3(八代、1998)のように適格に文化を表している。

人間ひとりにととえて見ると、顔、形を持った人間の見える部分は、どんな顔をした人なのかとか、どんな洋装なのかなどが明らかに判断できる部分ではある。しかし、

見えない部分としては、その人がどんな事を考えているのかとか、どんな常識を持ち、どんな価値観をもっているのかなどが上げられる。人間の見える部分は別としても、見えない部分を形成する大きな要因は、かれらがどんな国に誕生し、どんな環境でどのように育てられるかに大きな原因があると考えられる。

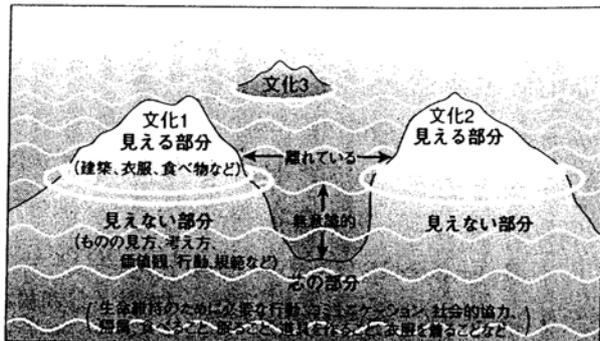
コミュニケーションに現われる異文化

背景の異なる人と生活をしたり、行動を共にしたりして感じる大きな点は、共に持つ両者の常識が大きく異なる点であろう。互いが外国人同士であるなら、相手の相違に対する受容性は容易に考えられるかも知れない。しかし、同じ民族で顔形⁽⁴⁾(1993)が似かよっているはずなのに、両者にはどこか違うんだということを感じることもある。これはアジア系の人たちの間で起こる問題である。アジア系の顔をしていても、上述のように互いに異なった文化を持っているから起こる問題なのである。今までの日本の歴史を遡ってみても、日本人と同じ顔をした人と外国語で話すという経験はそんなになかったはずである。日本人同士と思われるカップルが中国語や韓国語などではなく、英語やドイツ語などの欧米語などで話している光景を見るのは、日本人にとっては極めて稀なことであり、驚きでもあった時代が長かった。日本人であるなら、特に高齢者の場合、たいてい夕食に、和食を食べたいというのが普通であろう。中国人ならどんなに新鮮な野菜でも、油でいためなければ食べないというような習慣の相違が出てくる。また、中国人は北と南では異なるが、西洋人のように室内でも靴を履いたままの生活をしていることを知れば、同じ日本人のような顔をしていても、生活面での違った文化を発見することになる。欧米の国々で招待を受け、訪問した際、きれいなカーペットの上を靴のままですごすといわれ、躊躇したことのある日本人は筆者だけではあるまい。

八代⁽⁵⁾(1998)が述べているように、日常的な文化の違いは、どんなに小さくても、それが蓄積すると大きなストレスになり、私たちの精神状態に影響を与えることになる。そして、それまで意識していなかった身近で日常的な文化の重要性を思い知らされるのである。近年では、どこの国へ行っても日本食は食べられるが、日本食を食べたいと思うのが、正真正正の日本文化を背負った日本人であるという証拠にもなる。

このように、見かけは同じようであっても、生まれた国や生活環境が異なると、互いに違った文化を背負うようになるのである。このようなことの認識なしに人を判断するのは非常に危険と言えよう。

図3 文化の島



異文化は国際関係でのみ生まれる徴候か

必ずしもそうではないというのが筆者の結論である。異文化はどこにでも存在しているのが事実である。日本国内でも、同じような異文化体験を日常茶飯事のように経験しているはずなのに、余り実感としては持っていないのが普通のようなのである。外国との関係で考えてみると理解が容易かも知れない。同じ日本であっても「ところ変われば、品変わる」の例えのように、同じ日本国内においても異文化が多々存在している。これを真の異文化と見るかどうかについては議論のあるところかも知れないが、筆者の見解では、これは列記とした「異文化」としてと解釈する。異文化は二つに分けて、一つは国際的関係を背景とした広義の解釈。もう一つは内なる異文化、すなわち隣の市町村との相違、隣の家庭との習慣やルールなどの相違も、狭義の異文化とみなすものと考えられる。

もう一つ考えなければならない問題として、コミュニケーションはどんな場面でも使われている手段であることから、分野別コミュニケーションスキルズを考えなければならない。コミュニケーションはどんな日常生活範囲の中にも存在している。また社会集団と文化の関係においても考慮しなければならない。自分は他人とどれだけ共通の文化を所有しているのかなどが考えられる。今日のように性別、年齢、職業、国籍に関係なく、コミュニケーション上の問題が続発してきているのであるから、この分野での共通文化と異った部分の文化の整理をする必要も望まれるところである。また、多発する残酷な犯罪などの諸問題は、コミュニケーションの欠如と切り離せない何かの原因していることも事実である。人間同士の適切なコミュニケーションが取られていたら、このように、過去には存在しなかったような問題は起こらなかったのではないとも考えさせられる。

さらに付け加えたいことに、Listening（聞くことへの理解）がある。Communication 研究で Listening が如何に重要なポイントであるかが、今日の教育の中では Listening 研究教育があまり行われていないきらいがある。今後は Communication 教育の中で最も重要な部分になるであろう。

複雑化するコミュニケーション

現代社会におけるコミュニケーション行動が大きく変化していることに対し、萩野⁽⁵⁾(1998)はその要因として、国際化、情報化そして、対人関係の変化の三点を上げている。

今日の社会では適切なコミュニケーションに欠けていたばかりか、多種多様な前代未聞の社会問題が、国内では勿論のこと、世界のあちこちで発生している。家庭内暴力、幼児虐待などもコミュニケーションの欠如が要因

していると考えても良い。

日本の国際化は日に日に増化している。現在では、日本のどんな所へ行っても外国人との接触が余儀なくされてきている。異文化、多文化を持つ外国人と触れることにより、日本人のコミュニケーション行動も変わらざるを得ない状態になっている。常識、習慣の異なる外国人との接触で、異文化コミュニケーション摩擦や、深刻な問題も起こるのは当然の成り行きである。情報に関してわれわれの日常生活のコミュニケーション行動に急速な変化をもたらしている。電子機器の発達は、従来の日常生活の行動パターンを完全に変えてしまった。パーソナルコンピューターやインターネット、メディア等の利用で、今までの時間感覚は完全に変えられてしまった。地球の裏側で、今、起こっている紛争やナマの情報が、日常茶飯事のごとくに手に入れられる。地球的な観測で言えば、かつて存在した地球上における時差はないものに等しくなった。どんな場合でも地球を現時点で捉えることが可能になった。通信の面でも例外ではない。どんなに遠い外国にでも、いま流した、あるいは今話しかけたことに、すぐ回答が得られる時代に入った。待つ必要すらなくなってきているのである。このような情報の流れは、われわれのコミュニケーション行動のあり方に、大きな影響を与えたことは当然理解できる。しかし、情報化は確かにわれわれの常識を飛び越え、便利な部分のみが重宝がられてはきたが、対人関係においては大きな問題を残したことも事実である。情報化による社会構造の変化は、人間のこころを大きく変貌させた。

少子化、家族構造の変容、対人関係の希薄化などが新たな問題として起きてきたのだ。また、都市化の進行が起きている。人は都市に流れ人口は都市に集中する傾向は、全国津々浦々、至るところで起きている。このような人口の集中化は地域社会を崩壊し、人間関係としてのコミュニケーション行動の希薄化に拍車をかけてきたのは大きな問題である。

多文化か他文化か

恒吉⁽⁷⁾(1996)は日本では、「多文化」の問題が「他文化」の問題だとされている感が少なくないと述べているが、多かれ少なかれ当たっているようだ。どこかよその国で起きている戦争は、われわれ日本人にとっては、遠い存在で、実感としては大変なことだとは感じられない。生活領域が異なるため、自分とは接点を見出せないでいる。ブラウン管に現れる画面はよその出来事で、現実感が伝わってこないのである。グローバル化した世界の中にいながら、自分が世界の動きと密接に関わり合い、そこで起きていることに対して、責任の一端を担っているのだという、実感がわきにくいことにもつながっている。

特にテレビなどで見る世界の動乱や事件などは、ややもすると、テレビドラマの一部のようにしか受け取れない誤解も生まれる原因を生み出しているように思える。

多文化教育実践の第一歩は、国外の「他文化」と共に、国内の「多文化」を発見することから始まるのではないか。自分の地域に、学校に、職場にどのような「文化」を背負った人々がいるのか。彼らは社会でどのような役割を担っているのか。それはどのような社会の仕組みを通して行われているのか。こうした質問を自分に投げかけながら、足元の「多文化」を発見し、そして一枚岩に見えた「他文化」の中にも「多文化」を発見することから、身近な多文化教育が始まるのだ、と恒吉は言い切っている。

「他文化」から「多文化」への理解が必要で、自分でも痛みを感じられる人間教育が今後の大きな課題でもある。

おわりに

問題は山積している。社会はまさに複雑化していると捉えることができる。このような状態の中だからこそ、人間としてのコミュニケーション研究と教育の重要性が叫ばなければならない、と筆者は痛感している。

全章を通じて、コミュニケーション教育の目的は、相対的に誰とでも、どんな分野の人とでも多角的に、こころの通った対話（言語活動）ができる適応性を養うことであると言える。最近の若者のコミュニケーション活動を見れば、多角的な人間関係の経験が乏しくなってきた。また重層的な言語使用、いわば、相手によってことばを使い分けすることのできる訓練も重要である。これは現代の家族関係にも深く依存している。核家族から派生する諸問題は、本来は、多くの場合家庭でされるべき教育が、なされていないというところに原因が潜んでいる。これからの日本における多角的コミュニケーション研究教育が大いに期待される場所である。今や、教育を通じて異文化理解を深めようとする試みは現代社会の急務と言っても過言ではあるまい。

【註】

外国における古い日本語教材にこんなのがあって驚いたことがある。日本間の座敷でお膳を囲み、夕食のひとつときを表した挿絵に、下駄を履いたまま正座し、食事を取っている光景だった。昔日本人は下駄を履いて歩いていたことは事実としても、座敷で食事をする時も下駄を履いたままの絵を見せられたら、ああ、これが日本人の実際の姿かと誤解を招く挿絵だった。

REFERENCES

- (1) 広辞苑 1985 研究社
- (2) 岡部朗一「文化とコミュニケーション」古田暁監修、

石井敏、岡部朗一、久米昭始著『異文化コミュニケーション』（有斐閣）1996、P.42

- (3) Carter, J. "The Island Model of Intercultural Communication" SIETAR Japn Newsletter, July 1995, p.15 (八代訳)
- (4) 赤坂和雅「日本人の言語コミュニケーション」『コミュニケーション基本図書第2巻、日本人のコミュニケーション』第4章（桐原書店）1993。
赤坂和雅「コミュニケーション活動における日本人の言語観—ことばと顔をめぐって—」赤坂和雅、井上千恵子、川内規会著『言語と文化』Vol.32, No.1, 札幌大学外国語学部、1998pp. 1-10
- (5) 八代京子「なぜ、いまコミュニケーションか」第1章『異文化トレーニング』八代京子、町恵理子、小池浩子、磯貝友子著（三修社）1998、pp.18-20
- (6) 荻野綱男「複雑化社会のコミュニケーションの趣旨」『複雑化社会のコミュニケーション』日本語学9月臨時増刊号、Vol.7, 198pp. 2-3
- (7) 恒吉僚子 1996 多文化教育—グローバル化された世界の「平等」を求める、『教育がわかる』Aera Mook 朝日新聞社pp.38-39

(受理日：平成11年10月21日)

参考図書

- 徳川宗賢 1985 日米のコミュニケーション—言語と文化—, 南雲堂
- 原岡一馬編 1990 人間とコミュニケーション, ナカニシヤ出版
- 江渕一公 1997 異文化間教育研究入門, 玉川大学出版
- 秦野悦子、やまだようこ編 1998 1 コミュニケーションという謎 シリーズ 発達と障害を探る ミネルヴァ書房
- Howard H. Frederick (1993), Global Communication & International Relations, Shohakusha & International Thompson Publishing, Inc.
- Roy M. Berko, Andrew D. Wolvbin and Darlyn R. Wolvin (1998), Seventh Edition, Houghton Mifflin Company
- Ronal B. Adler, Lawrence B. Rosenfeld and Neil Towne (1980), Seventh Edition, Harcourt Brace College Publisher